

令和7年度 学校経営計画に対する自己評価計画中間評価報告書

P 1 / 5

石川県立穴水高等学校

| 重点目標 | 具体的取組 | 主担当 | 評価の観点 | 実現状況の達成度判断基準 | 判定 | 備考 |
|---|------------------------------------|------------------|-------------------------|--|---|--|
| 1 生徒自身が自己の目標を見据え、課題に対して主体的・継続的に取り組む姿勢を養う。 | ①進路選択に係る講話や体験活動等とおして、キャリア意識の向上を促す。 | [進路指導課] [各教科] | 【成果指標】 生徒各自が目標を達できた。 | 模試における英数国合計の偏差値が 55 以上の生徒が受験者の | <u>アドバンス</u> 〔7月模試〕 1年 D (8%) 1人/12人 2年 D (25%) 3人/12人 | 成果：偏差値 55 以上の生徒 1 年生 1 人、2 年生 3 人であった。 課題：生徒が自らの進路について考え、実現に向けて主体的に努力しようとする意識や向上心が不足している。特に、弱点分野や得点できていない科目について焦点を当てて学習することが課題となっている。また、教師側も学習の見通しを示して学習課題を適時適切な分量を課し、教科や学年間で情報を共有することが必要である。 改善策：クラス担任による進路面談や進路希望調査をもとに、進路指導課から進路選択に係る調査やガイダンスを適時適切なタイミングで、試みることで生徒の主体的な進路選択を促す。また、家庭学習の質向上と苦手教科・科目の克服をねらって教務課と classi (ベネッセ) やスタディサブリ (リクルート) の使用について連携を蜜に図る。 |
| | | | アドバンスクラス 模試偏差値 | | | |
| | | | ベーシッククラス 漢字検定 | 漢字検定準二級保持者の割合が A 50%以上 B 40%以上 C 30%以上 D 30%未満 | <u>ベーシック</u> D | 成果：3 B の生徒は、2 級を含んで 4 名の生徒が、準二級を取得している。16 名中 4 名なので 25%となる。1 B・2 B は、1 月に受検予定。 課題：3 B は、A 50%以上を目指してほぼ全員が、7 月に準二級以上を受検したが、今一步のところでは届かなかった。3 級は、全員持っている。 改善策：1 月の 1 B・2 B 受検者の指導に注力する。3 年生にも希望受検だが、受検を勧める。 |
| | | | キャリアコース 商業検定 | 商業各種検定合格率が A 75%以上 B 65%以上 C 55%以上 D 55%未満 | <u>キャリア</u> 11 月より 検定実施 | 成果：11 月より検定試験を実施する。 課題：個に応じた目標設定を行う。 改善策：家庭学習につながる課題設定と計画的・効果的な個別指導を実施する。 |

| 重 点 目 標 | | 具 体 的 取 組 | 主 担 当 | 評 価 の 観 点 | 実 現 状 況 の 達 成 度 判 断 基 準 | 判 定 | 備 考 |
|---------|---|---|--------------------------|---|--|---|---|
| 1 | 生徒自身が自己の目標を見据え、課題に対して主体的・継続的に取り組む姿勢を養う。 | ②習熟度(類型)別の授業・補習や学習課題等とおして、自ら学ぶ意欲を高める。 | 【教務課】 [各学年] [各教科] | 【成果指標】 各クラスの1日の学習平均時間(各定期考査までの期間)が アドバンスクラス 2時間以上 ベーシッククラス 1時間30分以上 キャリアコース 1時間30分以上 | 各クラス(コース)において基準を達成した生徒の割合が A 70%以上 B 60%以上 C 50%以上 D 50%未満 | アドバンス D (9%) ベーシック D (0%) キャリア D (7%) | 成 果: 1学期の平均家庭学習時間(1・2年生のみ)は、Aクラスは1.3時間、Bクラスは0.5時間、Cクラスは0.4時間であり、1年生が0.7時間、2年生は0.9時間であった。3年生の平均動画視聴時間は8.6分で、1日当たり約1本分の動画を視聴し必要な学習を別途進めている。 課 題: Aクラスの学習時間が伸びていない。B・Cクラスの学習時間が昨年度と比較し落ち込んでいる。 改善策: 考査前の課題だけでなく模試、検定等に向けて生徒が自主的かつ定常的に進めることができる課題設定を行う。 |
| | | ③教育ICT環境を活用し、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実をおして、確かな学力を養成する。 | 【ICT関連GIGAスタック】 [各教科] | 【努力指標】 ICT研修や互見授業を通じて「GIGAスクール構想」に適った、一人一台端末を用いた授業づくりに取り組んだ。 | 一人一台端末を用いた互見授業に参加し、「GIGAスクール構想」に適った授業づくりに取り組んだ教員の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満 | A (95.2%) A42.9% B52.4% | 成 果: 一人一台端末を用いての遠隔授業の実施や夏季休暇における課題の設定など、校外での勉強を意識した授業が増えている。 課 題: 全体の割合は前年度の100%に比べて減少した。新任の教員へのGIGAスクール構想の導入を積極的に進めていきたい。 改善策: 若プロ担当教諭と連携して、若プロの講習の内容にGIGAスクール構想を導入することで新任の教員に対してGIGAスクール構想への導線を確保するとともに、新たなアイデアの創出を図る。 |
| 2 | 規範意識と協調性を高め、自他を思いやる心を醸成する。 | ①学校内外の日常生活の場面で、TPOを前提とした判断と言動ができるよう支援する。 | 【生徒指導課】 | 【満足度指標】 規範意識を持って、自発的な行動ができていると考えている。 | 自分から主体的にTPOに応じた挨拶や言動ができている生徒の割合が A 90%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 80%未満 | B (87.1%) A27.4% B62.4% | 成 果: 朝の登校指導を始めて3年目になり、生徒の挨拶に対する意識は向上している。特に2年生では、C・Dが一人もいなかった。 課 題: 1年生は自分に厳しくアンケートに答えてくれたのかは分からないが、C・Dが多く今後の対策が必要であると感じた。 改善策: 1年生だけではなく、全学年に対し粘り強く挨拶の大切さを浸透させていく。また、朝の登校指導に生徒会執行部やクラスの会長、副会長を動員し、生徒達自ら挨拶ができるように指導していく。 |

石 川 県 立 穴 水 高 等 学 校

| 重 点 目 標 | 具 体 的 取 組 | 主 担 当 | 評 価 の 観 点 | 実 現 状 況 の 達 成 度 判 断 基 準 | 判 定 | 備 考 |
|---------|------------------------------------|--|--|---|--------------------------------------|--|
| 2 | 規範意識と協調性を高め、自他を思いやる心を醸成する。 | ②学校行事や課外活動をととして、多様性を尊重しながら協働できる姿勢を養成する。 | 【生徒会】 【満足度指標】 学校行事や様々な校外活動により、良好な人間関係を築き、何事にも主体的かつ積極的に取り組むことができる。 | 様々な活動をととして、他者と良好な関係を築き協働することができている生徒の割合が A 90%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 80%未満 | 年度末に評価 | 成 果：校舎の改修工事の影響も昨年よりも規模が縮小、制限されたが、生徒・職員が協力しながら様々な行事を行うことができた。 課 題：学校行事の運営・企画を生徒が主体的に行うことが必要である。 改善策：生徒会執行部を中心に生徒同士で企画。運営ができるような体制を作る。 |
| 3 | 地域との交流・連携を密にし、地域を理解し貢献しようとする姿勢を養う。 | ①地域資源(自然・人材・団体・企業)や他校種と連携し、地域理解を深め、探究する力を養成する。 | 【総探コーディネーター】 【各学年】 【満足度指標】 地域資源(自然・人材・団体・企業)や他校種との連携をととし、生徒が地域理解を深め、自己の将来を探究することができている。 | 地域資源(自然・人材・団体・企業)や他校種との連携をととし、生徒が地域理解を深め、自己の将来を探究することができていると考える生徒の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満 | B (86.9%) A27.4% B59.5% | 成 果：フィールドワークやグループ別探究をととし、生徒は自分たちの住む地域への理解を深めることができている。 課 題：探究の時間で学び取ったことを自己と結び付けることができない生徒が多い。 改善策：取り組むテーマと自分との関連を考えさせたり、活動後の振り返りで学んだことの自分ごと化を図らせたりする時間を設ける。 |
| | | ②地域ボランティア等へ積極的に参加し、地域貢献意識を高め、課題解決力を養成する。 | [生徒指導課] 【生徒会】 【満足度指標】 地域のボランティアやイベント等に参加した生徒が自己有用感を持ち、地域に貢献することができたと考えている。 | 地域のボランティアやイベントに参加し、地域に貢献できたと考えている生徒の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満 | 年度末に評価 | 成 果：地域復興に向けた様々なボランティアに生徒が積極的に参加することができた。 課 題：より多くの生徒が自発的に地域のイベントやボランティアに参加するような手立てが必要である。 改善策：地域のイベントやボランティアに参加する目的や意義を伝え、生徒に自己有用感をもたせるような言葉かけをする。 |

| 重点目標 | | 具体的取組 | 主担当 | 評価の観点 | 実現状況の達成度判断基準 | 判定 | 備考 |
|------|------------------------------------|--|-------------------------|---|---|--------------------------------------|--|
| 3 | 地域との交流・連携を密にし、地域を理解し貢献しようとする姿勢を養う。 | ③ホームページ等で、教育活動や生徒の様子を積極的に情報発信する。 | 【総務課】 | 【満足度指標】 ホームページや学校だより等をとおして、適切に学校情報や教育活動の様子がタイムリーに発信されている。 | 学校情報や教育活動の様子を知ることができる情報発信が、適切になされていると感じている保護者の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満 | A (97.6%) A76.2% B21.4% | 成果：97.6%と高い数値となり、ホームページだけでなくコラボルを利用した情報発信が要因と考えられる。 課題：情報発信のタイミングがタイムリーでないと感じている保護者が少なからず存在する。 改善策：各課と連携し、学校行事等見通しをもって情報発信を計画するとともに、生徒の声が届くような発信を心掛ける。 |
| 4 | 学校の教育力向上のため、組織力を高め、教師力の充実を図る。 | ①授業改善と資質向上に意欲的に取り組むとともに、組織的思考力や組織的行動力を高める。 | 【教務課】 | 【努力指標】 教員が他教員の授業を参観する互見授業ウィークを年3回設定し、各回2授業以上（他教科1授業以上含む）参観する。 | 互見授業ウィーク中2回（年間合計6回）以上参観した職員の延べ割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満 | B (80.0%) | 成果：互いに異なる年齢層や他教科の授業を参観し、授業者の良かった点や改善点から若手教員の対話的な授業やベテラン教員の幅広い知識と教科横断的な授業構成において授業づくりの参考となった。 課題：生徒の対話型授業が少なく受動的な授業が多い。教科横断・融合的な内容の授業を深めるための授業研究の時間がない。 改善策：若手教員の研究授業を参考にし、対話型授業での生徒の思考の深まりや、教科横断・融合的な内容を教科内で検討する。 |
| | | | 【若手教員早期育成プログラムコーディネーター】 | 【成果指標】 各期の若手がそれぞれの段階に応じた力を年間研修計画に即して身につける。また、若手教員が講師として研修を行い、担当業務以外の校務についての理解を深める。 | 校内研修の実施回数（互見授業研究授業・講師役も含む）が A 25回以上 B 20回以上 C 15回以上 D 15回未満 | 年度末に評価 15回未満（8月25日現在） | 成果：若手教員早期育成プログラム年間指導計画に基づき、計画を進めることができた。2学期以降は年間計画のほかに、研究授業の参観を通して、授業力の向上にも力を入れて取り組んでいく。 課題：若手が講師となる研修について、担当者が偏ってしまうことがあったため、Ⅰ期Ⅱ期の教員も担当できるように進める必要がある。 改善策：Ⅰ期Ⅱ期の教員が講師として研修を行う場面を積極的に計画していく。 |

| 重 点 目 標 | 具 体 的 取 組 | 主 担 当 | 評 価 の 観 点 | 実 現 状 況 の 達 成 度 判 断 基 準 | 判 定 | 備 考 |
|---------------------------------|------------------------------------|----------------|---|---|---------------------|--|
| 4 学校の教育力向上のため、組織力を高め、教師力の充実を図る。 | ②業務改善の意識を持ち、効率的・効果的に業務を実践する。 | 【教頭】 | 【成果指標】 組織として校務を効率的・効果的にすすめるために、適切な業務調整や連絡調整、相談体制がなされている。 | 職員ストレスチェック集団分析において、「仕事の量的負担・仕事のコントロール」項目と、「職場支援」項目におけるストレスリスクが県内平均に対して A 両項目とも下回る B 片方が下回る C 両方とも高い D 全国平均をこえ、高リスクである | 判定はストレスチェック集団分析の判定後 | 成 果：県内教職員の時間外勤務の平均と近い数値ではあるが、学習面や部活動、学校内外の諸行事については組織的に適切に対応できている。 課 題：震災で破損した施設の復旧が進まず、水やトイレ等使用制限されることが多く、通勤時間の増加や家庭環境の変化等でストレス要因が多くある。 改善策：学校全体で行う行事については、役割分担と協働作業の内容を事前に明確化し、担当者個人に大きな負担がかからない体制を構築する。通勤負担や住居再建などを意識して適切な休養や休日をとるなど、ワーク・ライフ・バランスの意識改善を推進する。 |
| | ③危機管理意識を高め、緊急時にも適切に対処できる学校組織を構築する。 | 【防災担当】 【教頭】 | 【努力指標】 想定される危機に適切な対応ができるような校内研修が行われている。 | 研修会により、生徒の安全を脅かす事態への対応の仕方が把握できたと考える教員の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満 | (89%) | 成 果：避難訓練（5月7日実施）及び原子力防災避難訓練（9月10日実施）後、生徒の安全を確保するための意識や指導についてアンケートをし、緊急対応の現状認識や意識向上を図るきっかけとなった。原子力災害については、戸外からの避難時にできることを生徒間でディスカッションをすることができた。「危機発生時対応マニュアル」についての考慮点の集約し、見直しの参考とした。 課 題：アンケート調査をふまえ、研修会の内容を考慮する。 改善策：停電時の校内の連絡や案内対応や、災害時の生徒のスマホ管理などについて、さらに検討する。 |